

西田幾多郎 その人と思想

京大時代を中心に

2019.01.30

京大文学研究科

現代文化学系 メディア文化学専修

教授 林晋

まずは講演者の自己紹介

- もとは数学者で学位論文のテーマは数理論理学。情報科学・工学に転向。文科省、経産省のシンクタンクでITやAI関連の政策研究も行う。
- この間に数学史の研究を開始。その関係で京大文学研究科に転職。
- 歴史研究のために、[史料分析用ツールSMART-GS](#)を開発。その関係で、京都学派第二の哲学者田辺元が遺した史料の研究を開始。
- 直ぐに止める予定だったが、数学史にも深く関連することがわかり京都学派の研究にのめり込む。主に田辺元と、京都学派第三の哲学者西谷啓治を研究。[京都学派アーカイブ](#)を開設。(準備中の[新版アーカイブトップ](#))
- その関係で、[京都市左京区田中上柳町の西田旧宅の保存活動](#)を行うことを依頼され、第一の哲学者西田幾多郎の研究も本格的に開始。

林の西田研究、京都学派研究の特徴

- 林は、文化史、近代化の歴史研究の一環として、京都学派の思想家たちに興味を持っている。哲学にもっとも近い研究の場合も、哲学史とは違い、「思想史」と呼ばれる手法を使っており、通常の意味の哲学者や哲学史家ではない。
- 西田研究の場合でいうと、哲学的内容より、西田幾多郎という人物について、特に西田が、その時代の若者たちに強く支持された理由や、その受け止められ方、例えば、西田幾多郎と哲学の道の関係などに、より強い興味を持っている。
- 本日も、そういうお話をします。まずは、西田という「ひと」の話から。

西田幾多郎 その人物

激しい魂：闘う哲学者西田幾多郎 1 / 2

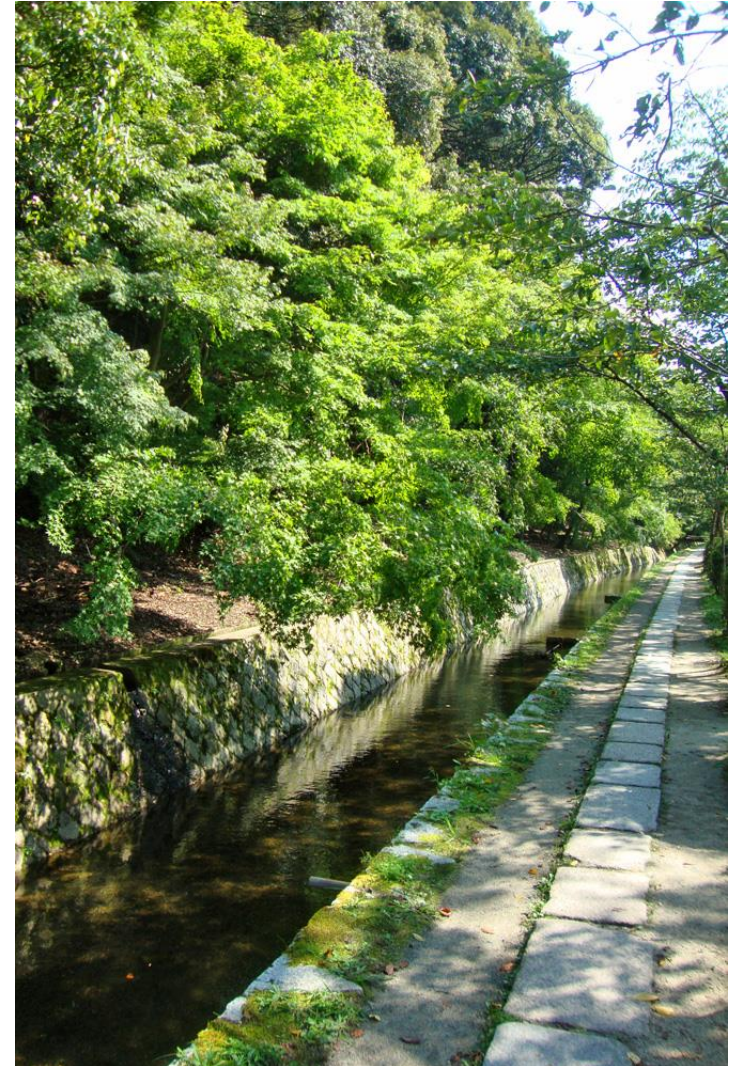
- 西田幾多郎と言えば、**哲学の道**を逍遙しながら哲学する悠然たる泰斗をイメージする人が多い。しかし、実像は、大きく違っていた。
- 家族を大切にした西田は、**家族と哲学の道**を歩くことはあったが、哲学しながら歩いたのは別の場所だった。哲学するとき、西田は、激しく魂を燃やすように歩いた。大方のイメージと異なり、西田幾多郎は激しい魂を宿した闘う哲学者だった。
- 西田が最も愛した弟子のひとりに、昭和20年9月26日に政治犯として獄死した哲学者三木清がいる。旧制第一高等学校を文科主席で卒業した三木は、その卒業時の大正六年の常識ならば東京帝国大学に進学するはずを、京都帝国大学に進学し、まだ一般には無名に近かった西田のもとで学ぶことを選んだ。

激しい魂：闘う哲学者西田幾多郎 2/2

- そして、この時から、全国の優秀な学生たちが京大哲学教室に集まるようになり、学問の世界を超えて知られる「京都学派」が形成される。
- 三木は「先生に接して私のまず感じたのは思想を求めることの激しさであった。私はかつて先生の如き本当の意味において激しい魂に会ったことがない」と述懐している。
- 一高生の三木は、西田が行った東京での講演に偶々臨んで、その姿に打たれたのである。その時、西田は壇上を右往左往しながら、哲学と格闘するように話したという。三木は講演の内容を理解できなかったが、西田の壇上を歩きまわる姿に打たれたのである。
- そして、その「歩く西田」と言えば、誰もが**哲学の道**を連想する。

哲学の道

- 滋賀県大津を起点とする琵琶湖疏水は、山科盆地を経て、東山を貫く第三トンネルを通過して京都蹴上に至る。主線は白川と合流して京都の街を潤すが、蹴上で別れ北上する疏水分線と呼ばれる支線がある。
- その疏水分線に沿う道の、若王子神社から銀閣寺までの部分を哲学の道という。
- 地元の哲学の道保勝会が自発的に整備を始めた、この地は、今や世界的に知られる観光地である。



西田幾多郎と哲学の道

- その哲学の道には、西田幾多郎の歌碑(参考資料図1)があり、そのためもあってか、西田が良く散策しながら哲学したので、哲学の道と呼ばれる、と説明されることが多い。
- しかし、参考資料図2の歌碑の説明文や、保勝会のWEBページを見てみると、西田が歩いたから哲学の道だとは書いてない。実は、林は、以前、保勝会の幹部の方から、西田先生が歩いたのは別の場所だったらしいと聞いたことがあった。
- これを話すと多くの人が大変驚くので、面白いと思って、ある時、弟子の証言を調べて、[どうも違うらしいとブログに書いた。](#)

読売新聞「名言巡礼」と西田幾久彦さん

- 読売新聞日曜版に「名言巡礼」という連載があるが、その担当者が、このブログ記事に興味を持ち、取材してくれて、西田幾多郎と哲学の道にちなむ名言巡礼の記事が掲載された。
 - その Yomiuri Online 版の該当ページ: [12](#).
- この記事を知った西田幾多郎のお孫さんの西田幾久彦さんから連絡があり、電話でお話した所、祖父に手を引かれて哲学の道を歩きました、とのことだった。
- ただ、それは寺院を訪問したり、ピクニックにでかけるときなどの話で、「哲学の道を歩きながら、祖父が思索をしたかどうかはわからない」とのことだった。(林晋ブログ: [哲学の道と西田幾久彦さん](#))

疏水が山から下りてくる所

- 西田が哲学しながら歩く時の、前のめりの激しい様子は、お弟子さんや息子さんの証言が残っており、子供や孫のことを常に気にかけていた西田が、殊の外可愛がっていた幾久彦さんの手を引きながら思索にふけるとは思えない。
- しかし、ここで林の文化史家としての研究意欲がむらむらと湧いた。西田と幾久彦さんがゆったりと歩く姿を、映画の一シーンの様に思い浮かべたい！哲学の道と仰るが、実は、疏水分線の道のすべてが哲学の道ではない、どの辺りを歩いたのだろうか？
- それで、具体的にどのあたりまで歩かれましたかと問うと、「疏水が山から下りてくるところまで」という答えだった。
- それはどこなのか？林は興味津々となった。

インクラインか？、扇ダム放水路か？

- 京都市水道局の琵琶湖疏水記念館学芸員白川さんの協力を得て、「疏水が山から下りてくるところ」の候補を検討したところ、蹴上のインクライン(参考資料図3-5)か、扇ダム放水路(参考資料図6, 7)だろうということになった。
 - 隠れた名所、扇ダム放水路については、ダム愛好家夜雀さんのサイトに詳しい(1, 2)。また、林の[ブログ記事](#)も。
- 写真では、分かりにくいですが、扇ダム放水路の背景の山は大きく、いかにも疏水が山から下りてくるように見える。一方、インクラインの背景は丘程度で山感が少ない。おそらくは、扇ダム放水路が、その場所で、そして、当時小学生だった幾久彦さんには、それは参考資料図7のように見えていたはずである。

西田が愛した京都市動物園

- 西田幾多郎は動物好きで、常に猫を飼っていたことが知られているが、京都市動物園を好み、お子さんやお孫さんを連れて行くだけでなく、一人で訪れていたことが知られている。
- 哲学の道に沿う疏水分線は、それを南に辿ると、若王子神社前でトンネルに入る。哲学の道もそこで終わるが、若王子前の道を西に辿り、鹿ヶ谷通に入り、それを南下すると扇ダム放水路にいたる。
- この放水路の横には、野村美術館や野村別邸碧雲荘などの豪邸が並ぶが、放水路横には小道があり、図7は、その小道から撮影したものである。そして、この道をさらに西に辿ると白川通にでるが、そこにあるのが京都市動物園。おそらく、西田は幾久彦さんの手を引いて、このコースを辿ったのだろう。(今度は、扇ダム放水路の古い写真を探さねば！)

歩く西田幾多郎 1 / 3 散歩の始まり

- 西田が、お孫さんの手を引いて哲学の道を歩いていたころは、昭和3年（1928年）の京大定年退官から、すでに10年ほどが経ったころだった。
- その頃の西田は、京大の代名詞百万遍交差点から歩いて数分の田中飛鳥井町の家に住んでいる。この家は大正11年（1922年）に、三井財閥の三井家から寄贈されたもので、広い庭の池で魚を飼えるような、当時の学者の家としても立派なものだった。
- 跡取息子の次男外彦さんによると、有名な西田の散歩は、この家の庭歩きから始まり、段々と遠出をするようになったという。
- その頃から、西田は段々と多くの人イメージするような静かな泰斗に変貌していったらしいが、それは大正15年に、「場所の論理」と呼ばれる哲学理論を公表して以後のことだった。

歩く西田幾多郎 2/3 たったった

- 場所の論理は、真に独創的と呼べる最初の西田哲学だとされている。西田本人もそう考えたらしく、自信を得たのか、この頃から、西田の人柄が段々丸くなっていったらしい。
- しかし、それより前の西田は違っていた。三井家に送られた家に住む前、林がその保存活動を行った、西田一家が大正元年から大正11年まで住んだ、田中上柳町の借家のころ、西田はあまり散歩をしなかった。また、その頃の西田は、次々と降りかかる不幸と闘いつつ、格闘するように哲学をしていたのである。
- たまに散歩をするときの姿の目撃談が、お弟子さんにより残されているが、それは前のめりの「たったった」と歩くようなものだったという。ただ、その場所がはっきりと書かれた史料は残っていない。

歩く西田幾多郎 3／3 哲学の廊下

- しかし、西田は、この頃も考えに詰まると、いつも歩きながら考えていたのである。ただし、その場所は、庭や道路ではなく、田中上柳町の家の二階の外廊下であった。(参考資料図8-10)
- 外彦氏や弟子たちの手記によれば、西田は、その廊下を動物園の虎の様に、右往左往しながら哲学し、それは、決まって考えに詰まったときだったという。その姿は、近くの道から丸見えで、外彦氏は、ともだちに、それを冷やかされて困ったという。
- 実は、西田が哲学をしながら京を歩く姿が、確実な証拠と正確な場所とともに記録されているのは、この廊下の右往左往だけなのである。

ひとときの安穩と突然の暗転

- 田中上柳町の家に移り住んだ大正元年から大正6年ころまでは、外彦氏によれば、西田の生涯でも、また、西田家にとっても、最も幸せな時代であったという。
- 京大哲学教授となり、始めて自らが望む仕事に専念できるようになった西田は、家庭的にも安穩に恵まれ、子供たちと好きな動物園にでかけたりしている。娘さんたちの手記には、この家でのつかの間の幸せを思い出す微笑ましい情景がいくつも記録されている。
- しかし、それは突然暗転し、西田は生涯でも最も辛い時代を経験することになった。

引き続き不幸

- 三木清が京大に入学した翌年の大正7年から、家族の不幸が連続して起きたのである。皮肉なことに、その不幸な時代は、外面的には、三木達若き俊英が京大文学部に集まり、また、旧制高校生に最も読まれた書と言われる、倉田百三の「愛と認識の出発」(大正10年)で、西田が絶賛され、「善の研究」(大正12年岩波書店より再版)も旧制高校生の必読書となり、西田幾多郎の名が、学界を超えて知られるようになっていった時代でもあった。
- その不幸を年表の様にまとめると…

引き続き不幸

- 大正7年(1918年) 9月3日母寅三死去(76歳)。金沢に帰省して看病。
- 大正8年(1919年) 9月14日寿美(ことみ)夫人が脳溢血で寝たきりとなる。
- 大正9年(1920年) 4月15日三高生で京都帝国大学への進学が決まっていた長男謙が突然発熱。腹膜炎。入院。
- 大正9年(1920年) 6月11日長男謙、腹膜炎・心臓内膜炎のため死去。
- 大正10年(1921年) 5月三女静子胸を患う。入院。後にカリエス。
- 大正11年(1922年) 5月四女友子、六女梅子共に腸チフス。入院。
- 大正11年(1922年) 9月田中飛鳥井町の新居に移る。
- 大正14年(1925年) 1月23日琴美夫人死去。

凄惨なる和歌

- 哲学の道の歌碑のように、西田の和歌は多く知られるが、西田の和歌集には、この時期のものが最も多い。そして、それは、たとえば、**運命の鉄の鎖につながれて打ちのめされて立つ術もなし**、というように、実に凄惨なものなのである。
- 妻が寝たきりになり、田中上柳町の家は、ふすまや障子も破れたままに荒れ果てていたといわれる：**妻も病み子等亦病みて我宿は夏草のみぞ生ひ繁りぬる**
- しかし、それらの中でも、特に心を打つのが、長男謙氏が急逝したときに歌った和歌の数々である。

西田幾多郎三高寄贈本の和歌

- 西田は、長男が亡くなった後、長男が卒業した三高の図書館に、多くの哲学書を送り、その数冊に長男の写真と、これらの和歌をしたためた。それは、三高への感謝と、長男謙氏の記憶をとどめるためだった。その内の幾つか(参考資料図11, 12)
 - 担架にて此途ゆきしその日より帰らぬものとなりにし我子
 - 死の神の鎌のひゞきも聞きつけで角帽夢みき逝きし我が子は
 - 垢つきて仮名付多き教科書も貴きものと筐(はこ)にをさめぬ
 - 五十日(いか)あまり重き思を抱きつゝ日々に通ひし病院の道
 - 徒らにむくろ残りて人並にのみて食ひて笑ひてぞ居る

場所の論理に向けて

- しかし、西田は、この苦境のさなか、真に西田哲学と呼べる独創的な哲学理論の建設に邁進した。それは、大正15年(1926年、12月25日より昭和元年)に発表された論文「場所」に始まる一連の論文で開拓された、「場所の論理」であった。
- 跡取息子となった次男外彦氏は、この頃、西田が、耐え難い現実の苦難から学問に逃避するのだ、と語った証言している。
- この場所の論理が発表されたのは、田中飛鳥井町の家でのことであつたが、その基礎は、田中上柳町の家で、打ち続く不幸の中で準備されたのだった。そして、その場は、この家の二階外廊下だった。

晩年の西田： 鎌倉の海岸で

- 京大定年後の西田は、京都の他に鎌倉にも居宅を持ち、その双方に住んだ。その頃の西田は、外彦氏によれば、かなり丸くなっていたらしい。しかし、西田の鎌倉の海岸での散策の共をした、女婿東大倫理学教授金子武蔵氏の記憶に見ると、違った印象を受ける。
- 昭和11年、岩波書店の雑誌「思想」で「西田哲学特集号」が組まれたが、散歩の途上、西田は、その諸論文を評し「文句のいえるのはやはり田辺だけで、あとは皆物マネにすぎぬ」と、杖で小石をはねとばしながら、激しく語ったという。第二の哲学者田辺は痛烈な西田批判でも知られている。
- 自らの独創的な哲学を打ち立て、また、家庭内の不幸も遠のき、広く考えられているような静かな西田像に近づいた時でも、その心の底には煮えたぎるような激しい魂が生きていたのである。

西田幾多郎 その思想

場所の論理とは 1 / 2

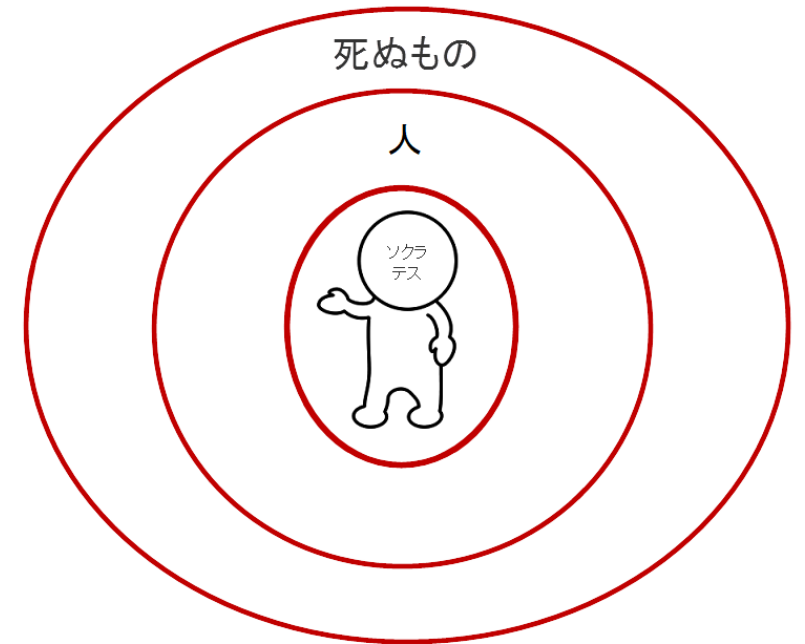
- 最後に、真の西田哲学と考えられている、場所の論理とはどんなものだったか、それを解説して、この講演を終わりたい。
- 西田の哲学理論といえは、「善の研究」が有名である。西田が京都に移り住んで直ぐに出版された、この本は旧制高校生が最も読んだ本の一つとされ、西田の名声はこれにより確立された。
- しかし、林は、ある同僚が、この本の時期の西田をアマチュアと評したのを聞いたことがある。
- 西田にとって、この本で打ち出した**純粹経験**という概念は生涯の重要なテーマだったが、西田自身も、それは学問的には不十分だと考えたことが知られている。その後の西田哲学は、この**純粹経験**の理論化、論理化のための格闘だったのである。

場所の論理とは 2/2

- そして、純粹経験というコンセプトの学問的体系に当たるものが「場所の論理」だったのである。それは「論理」、さらに言えば「論理学」であった。
- 21世紀の日本で、論理、論理学と言え、それは林がそれで学位を取得した数理論理学(記号論理学)のことである。しかし、西田の時代、そして、林が大学生のころまで、論理と言え、アリストテレス論理学とか、伝統的論理学と呼ばれるものだった。
- 西田の場所の論理は、そのアリストテレス論理学を革新しようという新論理学だった。

アリストテレス論理学

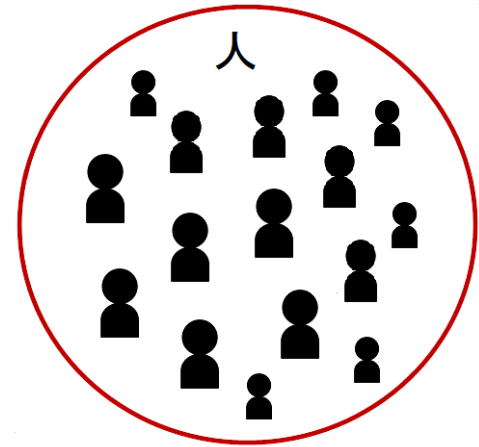
- アリストテレス論理学といえ、**「ソクラテスは人である。人は死ぬものである。よって、ソクラテスは死ぬものである」という、三段論法を連想する。**
- この論法の意味は、**数学の集合を使って説明すると、集合の包含関係の推移律である。**
 $A \subseteq B, B \subseteq C$ よって $A \subseteq C$
- つまり、次のような、論証である：
ソクラテス \subseteq 人、
人 \subseteq 死ぬもの
よって
ソクラテス \subseteq 死ぬもの



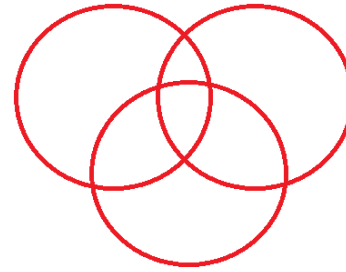
項: 分別(ぶんべつ)するもの



- これは、「ソクラテス」という言葉が、ソクラテスその人からなる集合を表すという考え方である。初めて聞くと、変に思える。しかし、...
- アリストテレス論理学では、概念を表す項、ラテン語で *terminus* (テルミヌス) と呼ばれるものを考える。先の三段論法の「ソクラテス」「人」「死ぬもの」は、この項なのである。
- ラテン語 *terminus* は、「終端」という意味である。「人」という項なら、人たちと、人でないものを、区別・分別する境界の赤い線と、それが分別するもの、それが項 *terminus* なのである。
- そう考えれば、「ソクラテス」という項を、ソクラテスその人の周りに、ソクラテスその人を、その他のものと分別する、赤い線を引いたものとして考えるのは、ある意味、自然なのである。



ちょっと脱線：ヴェン図



- 高校などの数学で集合を学ぶとき、ヴェン図とかベン図と呼ばれる図を学ぶ。先ほどの、三段論法の図は、そのヴェン図の一例だと考えられる。
- 日本では、集合の包含関係を図示するための図として知られるヴェン図だが、もともとは、アリストテレス論理学の様々な三段論法の形式について考えるために、1880年、イギリスの数学者[ジョン・ヴェン John Venn](#)が発明したものである。[これ](#)が原典。
- 日本ではアリストテレス論理学を学ぶことが少ないので、これが論理学由来だということが忘れられてしまったのだろう。Wikipedia のヴェン図の項目：[英](#) [日](#)

個：主語となって述語とならないもの

- 「ソクラテスは人である」、ソクラテス \subseteq 人、という判断の、左の項「ソクラテス」を主語、右の項「人」を述語という。
- 「ソクラテス」の様に、ただ一つのものしか指示しない項を述語とすると、それに対して正しい判断の主語となりえるものは、項「ソクラテス」それ自身以外にはない。
 - 空集合は何者をも指し示さないなので、通常は項とは考えない。
- これは逆に言うと、個というものを、「判断の主語にはなりえるが、それ自身以外の主語を持つ判断の述語にはなりえないもの」として定義できることになる。これを西田は、「主語となって述語とならないもの」と呼んだ。

分別（ふんべつ）の論理を超えて

- 西田は、主語となって述語とならないもの、すなわち個（個物）を真の实在だとみなすのがアリストテレス哲学だと考え、これが、理性重視の西洋哲学の根幹とみなした。
- 項 terminus とは、概念を切り取る境界の赤い線だと説明した。しかし、神でない我々が世界の全容を知らない以上、その外側に無限に広がる世界を理性で理解することはできない。その故に、人間理性に徹するならば、我々は terminus の内部に専念することになる。例えば、カント哲学が、そうである。
- しかし、西田は、それでは十分ではないと考えた。彼にとって、哲学は、理性の問題を超えて、人生の問題だったからである。

場所の論理

- 分別(ぶんべつ)の論理は、分別(ぶんべつ)の論理でもある。西田にとって、分別の論理であるアリストテレス論理では不十分だった。西谷啓治の言葉を借りれば、我々の個々の人生(実存)は、項と言う袋に包み入れようとしても、錐(きり)の様に、それを突き破るからである。
- そこで、西田はコペルニクスの転換を図る。
- 西田は、「主語となって述語にならないもの」ではなく、「述語となって主語にならないもの」を哲学の基礎にしようとしたのである。それは、terminusの赤い線を超えて、その外側に広がり、全てが、そこに置かれ、すべてを包む何かである。
- 西田は、その「すべてを包み、おかれるところ」を**場所**と名付けた。
- その論理こそが西田哲学の心髄である**場所の論理**、**場所的論理**である。

我が心深き底あり 1 / 2

- 西田は、その死の直前に完成された昭和20年の遺稿「場所的論理と宗教的世界観」で、この場所を、このように形容した： 我々の自己の奥底には、どこまでも我々の意識的自己を超えたものがあるのである。しかもそれは我々の自己に外的なるのではなく、意識的自己というのは、そこから成立するのである。
- 意識的分別を超えるが、我々の自己が、そこから成立し、我々自身が、心の奥底に見出すことができる、それが場所である。
- この場所の論理が発表され始めるのは、大正11年に田中飛鳥井町の家に移り住んでから、間もなくのころだ。

我が心深き底あり 2/2

- 西田幾多郎研究者の多くが、場所の論理、場所的論理の成立には、大正11年まで住んだ田中上柳町の家で、そして、その後移り住んだ田中飛鳥井町の家でも引き続いた家族的悲慘が関わっていると信じている。
- 西田は、日記とか、書簡とか、そういうもので哲学者を理解してはならないと弟子たちに繰り返し語り、自分宛の書簡は読むと、破り捨てていた。そういう人だから、自らの哲学が、自己の悲哀から生まれたなどとは語っていない。
- しかし、場所の論理が生まれようとする、その時の大正12年、西田は、ある歌を詠んでいる：

わが心深き底あり喜びも憂いの波もとどかじと思う

哲学の動機

- 西田は、もう一つ、有名な言葉を残しており、西田の生地である石川県かほく市にある西田幾多郎記念哲学館には、それが大きなタペストリーにされて掲げられている。
- プラトン以来の哲学では、哲学の動機とは、世界に対する驚きであるとされる。しかし、昭和5年(1930)の論文「場所の自己限定としての意識作用」の結語として西田は、この様に語ったのである：

哲学は我々の自己の自己矛盾の事実より始まるのである。哲学の動機は「驚き」でなくして深い人生の悲哀でなければならない

